

僚友・上野俊樹さんを偲ぶ

戸木田嘉久

1

1999年5月5日、僚友上野俊樹さんが亡くなった。膀胱ガン、享年56歳。私とはほぼ20歳も若く、彼としてはやり残したことも多く、きっと心残りであったにちがいない。しかし、私は20歳も年齢差があるなど、彼の生前には思ったこともなかった。度の強い近眼のメガネをかけ、顎をあげて傲然と胸を張り、真っ直ぐ一直線に濶歩する上野さんには、早くして大家の風貌がみられたからである。

もっとも、この畏敬すべき彼の姿は、けっしてコケおどしではなかった。齒に衣を着せぬ一直線の言動には摩擦も多かったが、その風貌には、専攻の経済学・経済学史研究における独特の視点と方法、その不撓の確信にたってすすめられた研究と教育の仕事、大学行政活動、さらには労働者教育活動など、揺ぎない実績がうつし出されていたとあってよいであろう。

私は通夜には行ったが、葬儀は都合で参列できなかった。京都「岡崎別院」での葬儀には、大学関係者を中心に、ひろく1000名をこえる参列者があり、とくにゼミの1期から17期までの卒業生、そして在校生、大学院OBなど、どの期も集団での参加がみられたという。私は上野山脈のひろがりにあらためて驚かされた。そして、もう20年も前、同じ「岡崎別院」で大雪の中でおこなわれた故末川博総長の葬儀には、市民をふくめ2000名近い参列者があったことなど、思い起したものである。

2

上野俊樹さんは、すぐれた経済学の研究者であっただけでなく、むしろそれ以上に熱心な「教育者」として、社会に貢献したところ大であったといえるかもしれない。しかし、私には、彼の経済学ないし経済学史研究の視点と方法、それに忠実な生活実践こそ、不撓の教育熱心の源泉であったように思われる。その意味でやはりまずは、上野さんの研究活動とその業績についてふれねばなるまい。

僚友であった向井俊彦さんによると、これから『上野俊樹概著作集（全6巻）』の刊行をもって、故人の研究業績が集大成されるようである。ともあれ、これまで公刊された著書は、私の知

るかぎりでは、単著『経済学とイデオロギー——経済学史の方法をめぐって』（有斐閣、1982年）、編著『現代の国家独占資本主義（上・下）』（大月書店、1987年）、単著『アルチュセールとプーランツァス』（1991年、新日本出版社）、この3冊かと思われる。

ところで、私の理解するところでは、とうぜんのことであろうが、この3冊のうち処女作『経済学とイデオロギー』が、研究活動はもちろん、教育活動、社会的活動など、事実上の出発点であり、土台となっているように思われる。そこに、私たちは、上野俊樹の傲然と一直線に闊歩する生活実践の姿勢、その原点をも読み解くことができるのではなからうか。

上野さんは、処女作の「はしがき」で、専攻する経済学史研究の意義と方法について、これまでの「経済学史」研究は、「現実の分析との有機的な連関を欠いたまま、解釈学の深い泥沼のなかに沈んでいる」と喝破し、つぎのようにいっている。

「考えてみれば、学説史的研究として必ずとりあげられるスミス、リカード、マルクス等の諸理論は、彼らが生きた時代の経済的問題と格闘し、それを分析したものであって、だからこそその理論は真理として今日まで保存されているのである。時代と格闘しないで、既知の理論にのみ拘泥する解釈学は、それが対象とする古典の科学的精神からはるかにへだたったところに存在している」。

それでは、学説史的研究はいかにあるべきか、上野さんはこう言いきっている。「現実の分析的研究が、その不可分の一環として学説史的研究を含んでいる」以上、「学説史的研究は、現実の分析的研究と一体となっておこなわれてこそ、本当の意味での科学的な学説史の研究になる」。

著書『経済学とイデオロギー』の副題は「経済学史の方法をめぐって」となっており、右の基本的視点にたった「本当の意味での科学的な学説史」の方法を確立しようとしたものであったといえよう。上野さんの研究活動の最終目標は、この科学的な経済学説史の完成にあったものと思われるが、中間的にしる著書にまとめられるには至らなかった。しかし、企画進行中の『著作集』第2巻は、「経済学史研究」が予定されており、この分野での彼の研究の到達段階が示されるものと期待している。

上野さんは、経済学史研究の方法として、現実の経済的分析との一体化を志向することから、現代資本主義の分析にも意欲的であった。編共著『現代の国家独占資本主義（上・下）』は、上野スクールともいわれた多様な若手経済学研究者20余名を総動員した研究業績であり、それは学史研究者としては全く特異な、彼の現実経済への強烈的な問題関心をしめすものといえよう。そしてまたこの編共著では、現実の経済的分析の方法として、逆に学説史的研究との一体化がはかられようとしている。

また、上野さんは、『経済学とイデオロギー』の「はしがき」では、人々の認識におけるイデオロギー的認識と科学的認識という、二重の認識を問題としている。人々はその「実践的な生活」では、「その現実的生活の条件を全面的に科学的に把握して生活しているわけではない」。そこに、「虚偽」であっても「宗教的イデオロギー」や、「その他の非科学的認識」を受入れたりする「現実的理由」がある。したがって、「実践的な生活」を歪めるこの「虚偽」のイデオロギー的認識はこれを抑制し、「実践的な生活」から排除していく必要があるというわけである。

この基本的姿勢の延長線上に、第3の著作『アルチュセールとプーランツァス』はあるといってよいであろう。それは、1970年後半から80年代にかけて流行した「ネオ・マックス主義」への

批判の書である。上野さんはこの書の序文で、「ネオ・マルクス主義」は、科学的社会主義の理論は「古くなり、現実を説明しないから新しい理論にとって代る」ことを主張するが、これは社会科学の科学的到達点を否定するもので、その内容の吟味は「社会変革をめぐるイデオロギー闘争の見地からも」「非常に大切なことである」と書いている。

さらに、上野さんは『経済学とイデオロギー』の「はしがき」の末尾では、科学的認識は「人々のなかに持ち込まねばならない」ことを、つぎのようにとくに強調している。「科学的認識は、人々の生活を導く実践的意識でなければ意味をもたないのであるから、それは科学的イデオロギーに転化して人々のなかにもちこまなければならない」。

上野さんの大学における学生や院生にたいするおどろくべき「教育熱心」、労働者教育への強い関心も、こうした経済学史研究にあたっての初心、科学的認識は人々の生活を導く実践的意識とならねば「意味がない」という、強固な信念に根ざしたといえよう。

また、この点に関連しては、前出した第3の著作のなかで、アルチュセールが学校教育を、もっぱら労働者の資本主義への服従を再生産する「国家的イデオロギー装置」であると主張するのにたいして、これは直線的で単線的にすぎると、たとえば、つぎのよう批判していることも指摘しておきたい。

いわく、生産力の発展にもかかわる「自然科学的な認識や科学教育は直接的には階級的なイデオロギー教育ではない」「学校教育の担い手である学校の教師や、学校に子どもを託している親たちは、階級的な労働組合運動や民主主義的な教育運動をとおして、子どもたちを……民主主義の担い手たる人間として育成しようと努力している」。こうした意味で、「学校は国家イデオロギー装置として支配階級の利益の担い手を養成するためにのみ機能しているのではない」。

こうした信念と理論にもとづき、上野さんは無類に「教育熱心」な大学教師として、撓ゆまぬ努力をつづけてきたにちがいない。ともあれ、彼の研究活動、教育活動、社会的活動、つまり、その教師生活の全体は、最初の著書「経済学とイデオロギー」の主張に一貫して導かれていたといえよう。

3

自分の思うところを真つすぐ一直線に進んだ上野さんには、摩擦も多かったといわれる。しかし私は労働運動論、彼は経済学史と専攻分野のへだたりは大きかったが、お互に意気投合する部分が大きかった。それは何よりも、すでにみてきた上野さんの研究活動の方法と姿勢に、共感するところが多かったからであろう。

それにしても、いまあらためて上野さんの「教育熱心」には頭が下がる。前出した第2の著作である編著の「はしがき」（1987年）には、「編者を含めて若い世代に属する本書の執筆グループは、約10年前から月2回の研究会、2ヵ月の1回の合宿、京都、丹後半島（六万部・妙国寺）での真夏時の約20日間にわたる共同生活をとおして、経済学、政治学、……方法論などを研究してきた」とある。このように指導はその後の10余年もつづけられ、こうして育成された若手の経済学研究者集団は50名近いのではないだろうか。

この研究者集団が育った土壌には、全国的にその名をはせた立命館大学経済学部の学術系サークル「マルクス経済学研究会」（マル経研）があり、ここでも毎年の学部の上野ゼミとともに、上野さんの献身的な指導があったことも知られている。

上野さんには、私が会長をしていた京都労働者学習教育協議会（京都学習協）の活動でも、しばしばお世話になった。経済情勢講座、経済学入門講座や、『帝国主義論』など古典講座でも、気軽に講師を引き受けしてもらったものだ。いまは、大学で上野さんの指導を受けてきた若い研究者諸氏も労働者教育に参加している。

学校教育を重視し、大学と学生を愛した上野さんの「教育熱心」は、学生部長時代にもみられた。硬式野球、アメリカン・フットボール、など重要な公式試合の応援にも、上野さんはもっとも熱心な学生部長だったのではなからうか。アメリカン・フットボール部が京大、関学に拮抗する力をつけてきたと喜ぶ彼の笑顔を、私はいまも思い出す。

私は立命館大学退職後、労働運動総合研究所の仕事をするようになったが、関西で研究会を組織し運営するにあたっては、いまも亡き上野さんに指導を受けてきた若い研究者諸氏の協力をえている。

こうして僚友、亡き上野さんの学問精神は、これからもますますひろがっていかずにはおくない。